

大温室内植物の開花・結実記録

高井 敦雄・梶原 芳信

I ココヤシ (*Cocos nucifera*) ヤシ科

開園当初から植栽されているココヤシの開花が確認されるようになったのは、2002年からのことである。開花後に実を付けることは何度かあったが、いずれも直径4～5cmの大きさになると落果していた。このたび、2個が初めて本来の大きさにまで生育したので報告する。

この2個を最初に確認したのは、2004年11月上旬のことであった。形は細長く、大きさは長径が約10cmであった。その後、順調に生育し、2005年4月中旬頃には長径が約15cmの大きさになった(写真1)。5月頃までは主に縦方向が伸長し、そ



写真1. ココヤシ4月13日の状態 果皮は全面緑色

れ以降は横方向に肥大しはじめ、7月下旬にはほぼ現在と同じ直径約20cmの大きさになった(写真2)。果皮は最初緑一色であったが、6月中旬頃から一部



写真2. ココヤシ7月28日の状態 果皮が一部褐色化

褐色化しはじめ、12月上旬頃まで果皮のおよそ3割程度が褐色化した状態であった。12月下旬頃には、表面にしわが寄り始めるとともに急激に果皮が褐色化してきた(写真3)。このような状況や他園の報告から、まもなく成熟が完了するのではないかと

思われる。



写真3. ココヤシ12月26日の状態 果皮の褐色化がかなり進行

II ソーセージノキ (*Kigelia pinnata*) ノウゼンカズラ科

2005年7月、ソーセージノキが3年ぶりに開花した。1997年に導入して以降、2回目の開花である。前回の開花等を報告した栽培記録24号の交配、ホルモン処理方法にほぼ従って交配、ホルモン処理を行った。このたび、初めて結実したので報告する。

1. 交配及びホルモン処理の手順

① 前日の夜に開花したほとんどの花は翌朝には落花するため、この落花した花の花粉を絵筆を使って採取し、二又に分かれた柱頭に付着させた。なお、栽培記録24号の報告に従って、ナメクジによる花粉の食害を防ぐため、逆さにした傘で花を受けた。

② 交配翌日にかく片から少しあふれる程度、ホルモン液(ジベラ錠200ppmあるいはトマトーン50倍液)を注入した。

③ ホルモン液を注入して2～3日後に手でかく片を傾けてホルモン液を捨て、除去した。

2. 処理結果

2005年6月20日頃に2本の主枝から合計4本の花序が現れ、7月3日夜に1番花が開花した。7月3日の1番花の開花以降、約20日間にわたって開花し(写真4)、その都度交配、ホルモン処理を



写真4. ソーセージノキ7月7日に開花した花

行った。なお、4つの花序のうちの1つから残った花柄先が伸長し、およそ1ヵ月後に4輪開花した。この時にはホルモン液をトマトトーンに変えてみたが、結実には至らなかった。

1ヶ月半にわたって4本の花序から合計70数輪開花し、そのうち3花が結実し、現在も成熟中である。他の多くは1週間のうちに花の基部から落下した。交配、ホルモン処理が成功し、子房が膨らんできても、すべてが順調に生育するとは限らなかった。今回は、子房の肥大が確認できたうち、半分以上が数cm程度の段階で子房の肥大が緩慢にな



写真5. ソーセージノキ7月28日の状態



写真6. ソーセージノキ12月5日の状態

り、やがて褐変し、落果した。結実に至った3つは長さが7~8cmくらいになると20cm超まで急激に伸長した(写真5)。それ以降は、徐々に伸長と肥大が起こり、褐色化した。現在は長さ23~29cm、太さ5~6.5cm程度にまで生育している(写真6)。

なお、今回開花に至った理由は、既存の大きく傾いた2本の主幹のうちの1本を株元から切断したことが原因ではないかと思う。株元から2本のシュートが発生したため、そのシュート1本と樹形を考慮して既存の1本を切ったことで株が刺激を受け、残る1本の主幹から伸びる枝に開花したのではないかと考えている。

III タビビトノキ (*Ravenala madagascariensis*) パショウ科

本園のタビビトノキは開園以来3回開花しており、このたび4度目の開花が確認された。2005年10月初旬に5つの苞が出現しているのを確認し、およそ1ヶ月半後の11月23日に第1花が開花した(写真7)。その後もう2花が開花し、12月中旬頃まで観賞できた。なお、開花して1~2日後には花色が白色から黄褐色に変色したため、1花の寿命は1日ないし2日であった。



写真7. タビビトノキ11月27日の状態